

教養学部こそ大学の理想

第9期 川合修平（1961年卒業）

昭和32年に駒場寮に入って、旧制一高生の落書きや寮歌に伺える哲学や漢学に関する深い素養に接して、教養のふかさに感銘した。それ以前にも、次兄が戦前の北大予科で恵迪寮にいた時の日記を見て、教養を高める楽しさにあこがれた。

そんな理由で、教養学科アメリカ科に入ったが、中屋健一先生は教養というもの何であるかを体験的に教えて下さった。それは学問の自由と、原典に対する厳密さと、自己表現の正確さである。

毎時間のアサインメントは史観の異なる著者の二冊を論評するものであるが、400字詰め原稿用紙に日本語で書く外人の名前の読み方がちょっとでも違っていると減点された。そして、よく言われたことは「どこの図書館にいつて、何を見ればわかるかを憶えることが、今一番大切である」ということ。

中屋先生は東大の大学院で新渡戸稲造門下の高木八尺研究室に居られたことと、ご自身アメリカンデモクラシーを研究されたこともあってか、リベラルで大学の官僚臭を嫌われた。そして、プライベートなことについては笑顔で「それは個人の自由だ」が口癖であった。

ある寒い朝、M君が広場に山積みの石炭を取りにいくと用務員に見とがめられた。すると先生は「石炭は学生のものだ！」と用務員を一喝された。それを見て私は、「偉い先生だ」と思った。

一方、遊びも重視されて、スキーに連れていっていただいたり、夏は谷川寮で一年先輩の人達と一緒にメンバーが自由テーマで発表する研鑽会も催して下さった（写真参照）。私は時事問題の「アイク・ドクトリン」について発表した。この合宿を通じて8期の先輩方とも親しくなった。

会社選びは、応募に対して教養学科からは誰も選ばない新興企業の積水化学にした。実はアメリカ科の先輩から、ある伝統企業の封建的人事の裏話を聞かされて、エスタブリッシュされた企業を避けたのである。



(谷川寮前にて)



(発表する筆者)

私の性格からして、これは正解だったと思っている。会社訪問の東京の窓口に法学部の先輩がいて、「うちの会社には東大は体育会系が多いから、優秀な教養学科の人が来てくれれば人事部長も喜ぶます」との言に乗せられてしまった。

配属は最初から「企画管理室」で需要予測の仕事をする事になり、中村隆英先生に習った「計量経済学」が大いに役に立った。ちなみに、後日その著書「昭和史」で大佛次郎賞を受賞された中村先生は、たった一単位お世話になっただけの私のレポート「ある消費関数」の作成指導のためにご自宅に招いてくださった。まるで院生に接するような丁寧な指導は教養学科ならではのものだったと、今更ながら思っている。

会社では、その後もスタッフとして経営の近くで仕事をさせてもらい、順調に推移した。順調過ぎて、途中で足を引っ張られたり、杭の頭を叩かれたりしたが、「叩かれたらまた出る」中屋先生スピリットを貫いて何とか切り抜けた。

戦前は、浜松市近郊の地主の末子としてぬくぬくと育ち、戦後は所謂「転落農家」となって悲惨な生活をたっぷり味わった。そのせいか、反骨と自由を求めて生きたわが人生だったが、悔いするところはないと思っている。

今現在は、閣僚や議員に教養の低い人達が多くて、憲法改悪により基本的人権まで侵されようとしているのにはいたたまれず、毎日ツイッターで「緊急事態法案」と「テロ等組織犯罪準備罪法案」反対を叫んでいる。自公議員には中村隆英先生の「昭和史」をじっくり読んでもらいたいものだ。権力者は国民の権利を抑制する時は、いつも本当のねらいをカモフラージュすることがわかる。

最後に、今回ノーベル賞を受賞した大隅良典氏に対して、「氏は教養学部卒だから為しえた研究である」という黒川清東大医学部名誉教授の談を紹介したい。

「大隅先生は教養学部を出たという点が違うと思う。理学部や医学部だとどうしても有名な教授がいて、時代の最先端の研究をしていることが多い。違ったところから変なものが見つかる可能性が少ない」と。つまり、理学部や医学部ではマウスやメダカを使うので、酵母を使うような変な研究には予算がつかないだろうというのである。(日経朝刊・2016、10、4)

多様性の尊重と権威におもねらない批判精神と事実と厳正な姿勢、が教養学部の真髄と言えよう。これこそは大学の存在理念でもあると思う。